備考	本	時 の 学 習	指導計画	i		本	お無	評 評	単損	単	科	実施日
2 正補	まとめ	展	開	導入	過程	本時の目標	おける位置付け年間指導計画に	評価規準	単元の目標	元名	目夕	
2~134 曾良正昭 校注・訳 小補助教材 (別紙)	確認する。 でいるかを (情の)の俳句が (情の)を背景と (情の)を背景と (情の)を (情の)を (情の)を (情の)の (情		トロイ 会 会 い い い の も が い い い に い に い い い い い い い い い い い い い	品の確認 上入った作 宗で三票以 作	沿衛群			٦			名古	八五年十月十七日( 
曾良随行日記「新版(おくのほそ道」(角川ソフィア文庫)p270~272(小学館日本古典文学全集第31巻より) 義経の実像「平家物語の虚構と真実(下」(上横手雅敬)) 注釈「おくのほそ道全訳注」(久富哲雄・講談社学術文庫452)p173~183(文学上の	ででは、		学習者の理解を促すようにする。	ントの該当箇所を告げる。 墨書し、掲示しておく。 自注・自解プリ	指導学習	異なる視点・素材で作られた俳句を披露しあう中で、芭蕉の思い第五時・・・・・俳句を披露し合わせる。(本時)第三・四時・・・俳句を作らせる(図書室での調べ学習を含む)第一・二時・・・「平泉」の段の内容を理解させる。	、単元「近世の世界 (二)」で「寒夜の辞」・「笠(土佐日記」や「枕草子」の学習で身につけた	広げることができたか。 俳句の意	俳句の表現の特色を理解し、無常観を読み取る。俳諧紀行文を読んで中古以来の日本人の精神的伝統のひとつである無常観を読み取る。	俳諧紀行文	古典(古文)	金) 二校時 実施クラス 普通科二 一 古同笙寸 学子 校 田田 岳田
	鑑賞文を書く。 鑑賞文を書く。		感じ方、考え方を広げる。 発表者以外は発表をよく聞いて、ものの見方、解説を行う。	自注・自解プリントで、該当作品をチェックする。	: 学習者	-で、芭蕉の思いへの理解を深めさせる。	八単元「近世の世界(二)」で「寒夜の辞」・「笠張り」・「銀河の序」・「芭蕉を移す詞」など芭蕉作品を学習する足がかりとす「土佐日記」や「枕草子」の学習で身につけた「読解力」により「平泉」における芭蕉の思いを的確に理解する。また、第「一	俳句の表現の特色を捉えることができたか、また、ものの見方、	統のひとつである無常観を読み取る。	教材名 「教材名」 奥の細道教科書名 東京書籍「	指導領域 「読むこと」	組四十三名 指導者 教諭
下」(上横手雅敬著・塙新書62) p1183 文学上の義経像「義経記」(梶原	集中して話を聞こるか。	うとしているか。もの文の流でであります。	自分の考えを正しく伝えようとしているか。(声の大きしているか)また、	ようとしているか。味・関心を持って接しているか。	評価の観点		で学習する足がかりとす 唯に理解する。 また、第	見方、感じ方、考え方を		奥の細道 平泉東京書籍「国語 (古典編)」		小井田 浩司